

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『しろくまちゃんのホットケーキ』を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

古賀 琢磨・杉野 翼・田中 梨里花

田邊 歩乃佳・深町 萌絵

宮崎 千也加・三好 花々

題材とした絵本：『しろくまちゃんのホットケーキ』

作： わかやま けん

出版社： こぐま社

初版年： 1972年

タイトル：「しろくまちゃんのホットケーキ」

配役：しろくまちゃん（宮崎千也加）、しろくまちゃんの母（三好花々）、こぐまちゃん（田邊歩乃佳）、撮影（田中梨里花）、ナレーション（深町萌絵）

担当：プロデューサー（田邊歩乃佳）、衣装（宮崎千也加）、小道具（杉野翼）、カメラ音（古賀琢磨）、報告書（深町萌絵）

1. 題材「しろくまちゃんのホットケーキ」選定の理由

「しろくまちゃんのホットケーキ」は、こぐまちゃんシリーズの1つである。この作品ではしろくまちゃんがお母さんのお手伝いをしてホットケーキをつくり、こぐまちゃんといっしょに食べて、食器を洗う等片付けをするまでの流れが描かれている。そして、作ったホットケーキを食べる「見立て遊び」や、お母さんといっしょにホットケーキをつくる「お手伝い」、食べ終わったお皿をきちんと洗うという「お片付け」など子どもが経験することがこの絵本に描かれている。

また、しろくまちゃんのホットケーキという題材は、ストーリーが分かりやすく、実際にホットケーキも子どものおやつとして親しまれているため、子どもたちも興味を持って見ることが出来ると考えた。また、この題材はストーリーだけでなく、「お手伝いしたい!」という4歳児の今の成長傾向に適した構造になっていることから、私たちのテーマである「絵本を通じて楽しめる遊び」を4歳児に体験してもらうことに適していると考え、この題材を選んだ。

（古賀）

2.「絵本の世界を楽しむ」

この題材において、私達は子どもたちに見立て遊び、本物の生地を焼く様子、絵本の主人公であるしろくまちゃんとの対話を楽しんでほしいと考えた。そのため、以下の対話的な活動を考えた。

・見立て遊び

見立て遊びとは、目の前に存在しないものに対して、何かを見立てて想像しながら遊ぶものである。活動の中では、手を叩くと目の前に出てくることをイメージした見立て遊びを設定した。

まず、ホットケーキの生地をつくる際に行った。しろくまちゃんが材料をボウルに入れて混ぜるとき、子どもにも手伝ってもらおう。「手を叩いたら目の前にボウルがあると思ってね」と言葉を掛け、手を叩き、「ボウルがあるね！泡立て器を持って一緒に混ぜよう」と言い一緒に生地を作る。子どもたちが作った生地をしろくまちゃんが画面越しに受け取る。この見立て遊びは、『しろくまちゃんを手伝いたい！』という気持ちを喚起して、想像して遊ぶことを想定した。

次に、出来上がったホットケーキを食べる際に行った。「手を叩いたらホットケーキがあると思ってね。」と言葉を掛け、しろくまちゃんたちと一緒にホットケーキを食べる。このホットケーキの見立ては様々で、クリームがついてたりイチゴがのっていたり、子どもの想像力を膨らませながら遊ぶこととなった。

・本物の生地を焼く様子を見る

2つのカメラを活用し、1つは作った小道具でホットケーキの様子を映し、もう1つのカメラで火を使って本当に生地を焼く様子を映した。実際に焼く様子を映した意図は、ホットケーキを食べたことがあっても、作る過程や焼いている様子を見たことがある子どもは少ないと思ったこと、さらに、興味を持って見てもらえると考えたからである。また、絵本『しろくまちゃんのホットケーキ』の生地を焼く場面はとても印象的なので、取り入れた。

・しろくまちゃんとの対話

これは、お話中にしろくまちゃんと対話する場面がいくつかあり、しろくまちゃんの問いかけに対して子どもたちが答えると、しろくまちゃんはその答えを聞いてくれたり共感してくれたりする。これにより、自分の声がしろくまちゃんに届いていてお話が出来る子どもは喜ぶと考えた。

また、絵本の世界をより身近に感じ、もっと楽しめるように、材料や料理道具等の小道具を大きく、そして子どもたちに分かりやすいように丁寧に作った。

実際に子どもたちが「しろくまちゃんのホットケーキ」の世界に入って楽しむことが出来る考えた。

(深町)

引用（下線部）：インターネット
KIDSNA キズナコネクト 「見立て遊びとは」

3.対話的表現活動で大切にしたこと

まず、子どもの目線に立って、子どもとの対話を楽しむことだ。絵本のお話をすぐ始めるのではなく、始めに子どもたちに挨拶をして、絵本のテーマである「ホットケーキ」につ

いて尋ねた。ホットケーキを作ったことがあるか、作ったことがあるお友達（子ども）は誰と作ったのか、皆（子どもたち）が食べたことのあるホットケーキはどんなホットケーキだったのか等、子どもたちがどんな状況にあるかを確かめながら進めることである。その結果、子どもたちは、活動中も常に対話することが出来ていたと考える。始めは緊張していたようにも見えたが、一人の子どもが声をあげると、次から次に子どもたちが話し出して、子どもに今からどんなお話が始まるのか、興味を持ってもらえたと思う。また、しろくまちゃんが生地を混ぜるとき、「おいしくなあれ」と言いながらすることで、子どもたちも真似しやすそうで、一緒に「おいしくなあれ」と発言していた。

次に、子どもの発言や行動等を事前に予想して、本番では、子どもの発言を見逃さず、臨機応変に対応することだ。しろくまちゃんが子どもたちに、「（ホットケーキの）材料は何だと思う？」と聞く場面では、子どもたちの性格等は十人十色で、園によっても変わってくるため、どのように対応すれば良いか、想像しながら考えた。また、しろくまちゃんとかぐまちゃんと子どもたちでホットケーキを食べ終わったとき、子どもたちが「おかわり」と発言していた。そこで、「もう一回やってみよう」と言葉を掛けて、子どもたちと一緒におかわりをした。また、「次は何をかけて食べようかな」とアドリブで子どもに話し掛けると、子どもたちは、次々にホットケーキにかけたいものを口にしながら、喜んで食べていた。

最後は、子どもたちが自由に動いてもらえるような活動を考え、取り入れることだ。先生の助言をいただき、手を叩くとポウルやホットケーキが目の前に出てくる、という『見立て遊び』を取り入れた。ポウルをかき混ぜたりホットケーキを美味しそうに食べたり等、途中途中で動きを取り入れることで、子どもたちが見るだけではなく、動きで表現することの楽しさを味わってほしいと考えた。

以上の3点が、私達の対話的表現活動で大切にしたことである。

(深町)

4.内容について

(1) 全体の構成

導入で、ナレーションが子どもたちとお話する。ホットケーキを作ったことはあるか、それがどんなホットケーキだったかを尋ねる。準備が出来たら、しろくまちゃんを子どもたちと一緒に呼んでストーリーを始める。

展開では、子どもと対話しながら、しろくまちゃんはボールに材料を入れ、子どもたちにも呼びかけて一緒にしっかり混ぜて生地を作りそれをフライパンで焼いてホットケーキを作る。ホットケーキが出来たらお友達のかぐまちゃんと一緒に頂きます。食べ終わったらお皿を洗ってお片付けする。

最後には、ナレーションが子どもに劇の感想を聞く。そしてしろくまちゃんたちを呼んで皆でバイバイする。

(古賀)

(2) 子どもたちとの対話について

こども劇場では、「しろくまちゃんのホットケーキ」の題材を行って子ども達との対話を行った。リモートでの対話では通信状況や声の聞き取り具合などの都合上、コミュニケーションが取りづらかったり、一つ一つのことを理解して話が通じ合っていたかがわからなかった。子ども達の姿は、リアルタイムの映像からよく見ることはできたが、子ども達との対話は少し難しい点があった。それは、子ども達に問いかけをすると時間差があったり途切

れたりはしたからである。しかし、劇を行なってきちんと会話できたり、動きを取り入れて子ども達と一緒にする時もきちんとできていたようにも感じた。しろくまちゃんのホットケーキを題材に行ったこの劇では、子ども達にとっては初めての体験だったり、リモート自体を楽しんでいる子どももいたように感じたのでリモートでの対話は結果的にうまくいったのではないかと思う。子ども達との対話は、多い方ではなかったかもしれないが、動きを取り入れたり、子ども達に問いかけをすることで自然にコミュニケーションを取ることができたのではないかと思う。実際に対面して話したり、動いたりするよりも伝えることの難しさや通信状況などを考えなければならない分、子ども達にとっても、私たちにとってもとても貴重な体験になったのではないかと劇を行って感じる事ができた。リモートでの表現だった為、子ども達にとっても私たちにとってもわかりづらく対応できない所、コミュニケーションを取るはずだったのに取れなかったなど途中あったが、子ども達の姿を見ながら劇を行い一緒に動くことでお互いに楽しむことはできたのではないかと思う。実際に行うのと、リモートで行うのとではやりやすさや緊張感なども変わってくると思うのでその時その時に応じた対応が必要だと感じた。子ども劇場での子どもとの対話を通し、子ども達の姿から考えていることの把握やコミュニケーションを取ることの難しさを改めて理解することができたと思う。

(杉野)

(3) 演出の工夫 (道具や見せ方)

演出の工夫として、通常の保育とは違い画面越しの子どもたちへ伝わるような道具だったり動きを工夫した。一つ一つの道具のサイズを大きくしたり、中でもフライパンやホットケーキを特に大きくしたりすることで、物語を分かりやすくするとともに子どもたちの好奇心をくすぐることができたと思う。(写真1参照) また、制作物は段ボールと画用紙を使用していることがほとんどの為、演出をする中で子どもたちにその事を悟られずに見せることが難しいと感じた。



写真1 洗い物をしている様子

角度ひとつや持ち方一つにしても意識しないと、子どもたちに伝えたい事や本来のねらっている事とズれてしまうので子どもたちから見た景色をイメージしながら行うことが大切だとわかった。また、道具のサイズだけではなく背景の色やカメラ越しの色にも気を遣った言葉選びだったり、色遣いを繰り返し練習を行う中で意識することができた。

私達のグループでは、人数が少なく1人が複数の配置を担当していた。その中でも、洗い物をするときの泡や水しぶきなど、しろくまちゃん以外の細かな動きにも意識を向け、工夫する事で楽しみながら物語を進める事ができたと思う。また、演出を行う人だけではなく、カメラやそこに映ってはいない人の動きで演出を大きくしたり目立たせるように繰り返しリハーサルを行うことで改善していった。

実際のこども劇場を行ってみて、子どもたちはたまごが殻から出てきたり牛乳が出てくる仕掛けに興味しんしんで夢中になって見ていた。(写真2参照) その反面、小麦粉等は何もなかった為「何も出てないよ」という声が多くあった。対象年齢児が違うことによって子どもたちの気づきも違い、子どもの発達や考え方の違いなどそこから学びを得ることができた。

リモートで行うことは実際の保育とは大きく異なるので動きや言葉の言い方一つ一つを意識し、画面の向こう側からの見方をイメージしながら進める必要があるので実際にやっている自分では気付かないことが多くあった。だからこそ、プレパフォーマンスや回数を重ねながら、子どもたちの反応だったり自分たち同士で意見を出し合ったりしてよりよいものを作っていくことができたと思う。

(宮崎千也加)

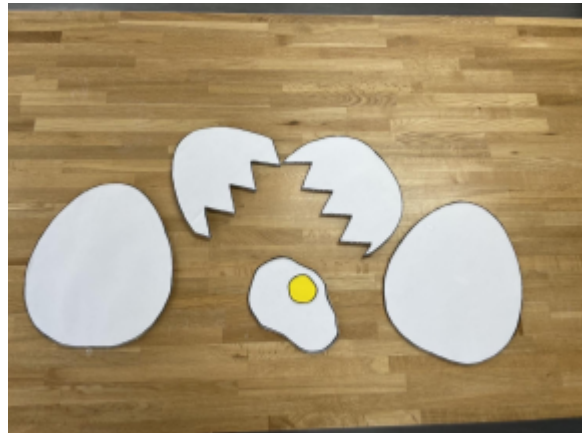


写真2 卵が割れる様子(割れた卵がでるしくみ)

(4) 音と音楽

劇「しろくまちゃんのホットケーキ」を行う中で音楽をつけたり擬音の音をつけたりなどの工夫を行った。もともとしろくまちゃんのホットケーキには音楽がついておらず、手遊びを取り入れるなどの話が出ていた。だが、私達のグループは人数が少なく劇を行うのが精一杯でピアノを弾ける人がいなかった。また、せっかく子どもたちとオンラインでコミュニケーションが取れるのならと、対話を中心に活動するよう話が進んだ。そのため、しろくまちゃんがエプロンにお着替えの際には事前にピアノの音をとって流した。

絵本にはホットケーキを作る際の擬音が沢山描かれていた。それを実際に子どもたちに伝えたくて言葉で言ったり、実際にホットケーキを作り、実践した。

(写真3参照)



写真3 実際にホットケーキを焼く様子

材料をかき混ぜるときにも、子どもたちと一緒に混ぜるよう声掛けをした。

プツプツなどの擬音がわかるように、大きいサイズのフライパンを作り子どもたちにもわかりやすいように行った。(写真4参照)

このフライパンの下に人が入り、下から布を突き上げプツプツを表現し、擬音を子どもたちにもわかるよう工夫を行った。

(田邊)



写真4 フライパンの底を布にしている様子

(5) プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

12月2日(木)にプレ・パフォーマンスを行った。そのときの子どもの姿は、しろくまちゃんが牛乳、小麦粉、お砂糖、ふくらしこなど、材料の名前を言いながらボウルに入れるときに子どもと一緒に材料の名前を発言していたり、集中してお話を聞いていたりしていた。しかし、子どもたちに話しかけたり問いかけたりするだけで、終始した。お話の発表がおわった後、現地にいた先生が「もしも皆の前にホットケーキが現れたら、どんな顔をして食べるのかな。ちょっと見てみたいな」と子どもたちに言葉を掛けていた。そして先生が「手をパチンと叩いたら、皆のお手手のところにふわってホットケーキがあると思ってね。」と言葉を掛けた。すると、子どもたちは手をパチンと叩き、そこにホットケーキがあると想像し、匂いを嗅いだり美味しそうに食べたりしていた。そこで、ホットケーキの生地を混ぜたり、ホットケーキを食べたりするときの動きを子どもたちとも一緒にしたら、もっと楽しめるのではないかと考えた。

また、エプロンを着る時に【おきがえちゅう】という文字を出していたが、しろくまちゃんが画面上からいなくなり、子どもの集中が少し切れた。だから、着替えてる様子も映し、子どもたちの集中が切れないようにしようと考えた。着替える際に、しろくまちゃんの耳が取れてしまう課題が見つかったので、お母さんに着替えを手伝ってもらうという方法を取り入れた。

実際に本物の生地と出来上がっているホットケーキを用意して、フライパンに生地を流したり出来上がったホットケーキを見せたりした。子どもはこれらの様子をじっくり見ている。その後、本当に火を使ってホットケーキの生地がブツブツになっていく様子を見せたら、もっと子どもたちが興味を持って見てくれるという先生の助言もあり、ガスコンロ等を準備して実際に焼いている様子も映すこととなった。

そして、お話が終わった後、子どもたちが「ホットケーキ食べたい！」等言っていた。しろくまちゃんが作ったホットケーキを見て、自分も食べたいという気持ちになったと考える。また、しろくまちゃんとかぐまちゃんがカメラの前に立って子どもと話すと、子どもたちはとても喜んでいて。リモートで直接会うことは出来ないが、子どもたちは、しろくまちゃんたちと会話することで、しろくまちゃんたちに自分の声が届いていて、それに答えてくれることがとても嬉しかったのだと考える。リモートで行うことで、本当に絵本の中からしろくまちゃんたちが出てきて、お友達みたいにおしゃべりしたり、一緒にホットケーキを食べたりするという体験が子どもたちは出来たのではないかと思う。

材料をボウルに入れる際、卵の殻や牛乳パックなどをそのままボウルに入れていた。そこで、卵は割って中身だけをボウルに入れて殻を捨てる、牛乳や小麦粉などはボウルに入れるフリをして、それをボウルに入れずに袋を机に戻す、という工夫をすることにした。

このように、子どもたちの反応から次のことが考えられた。まず、子どもとの対話をもっと増やさなければならぬことである。そのためには、臨機応変に対応することが重要だと思い、台本を見直し、子どもたちが話したり聞いたりする言葉を想像し、どう対応するか予め皆で考えた。

(深町)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

・準備をする中での改善と工夫

準備を進めていけば行くほどどんどんこうした方がいいのではないか、ここをこうした方がいいのではないかという改善点がでてきた。先生からの助言もあり、ホットケーキを本当に焼いた。子どもたちも「え、本物？」と言ってる子達もいてとても反応が良かったと思う。

子どもたちに本物を焼いて見せたことで、子どもたちの感心を引くことが出来たし飽きずに見てくれていて本物を使ってやってよかったと思った。

(田中)

(7) 子どもたちの様子と表現

1日目と2日目、それぞれ2つの園で発表した。

子どもたちの様子は園によって様々で、一様ではなかった。

1日目に実施した園の子どもたち(4歳児)は、あまり発言はせず、静かに集中して見ている。しかし、本物の生地を焼いている場面で、ホットケーキの生地をひっくり返してきちんと焼けているホットケーキを見て、「はっ!」と声を出していた。「見立て遊び」では、しろくまちゃんの姿を見て真似しながら表現していた。

2日目に実施した園の子どもたち(5歳児)は元気で、反応もよく発言もたくさんしていた。最初の導入から、子どもたちはお話が始まるのを楽しみにしていた。ナレーターの質問に対してきちんと答えていて、想像力を膨らませてその答えに関連した言葉を発言していた。また「しろくまちゃん、ホットケーキ上手に作れると思う?」という問いかけに対し、1人の子どもが「作れんと思う」と話すと、もう1人の子どもが「作れるよ」と会話していた。しろくまちゃんの「ホットケーキつくるぞ」や、「おいしくなあれ」、「いただきます」などの多くの発言に子どもたちは反応し、自分たちも一緒にしろくまちゃんと声を出していた。

このことから、年齢によって見る視点が違ったり、感じ方や受け取り方が違ったりするということを学んだ。

(三好)

5.取り組みを通して得たこと

【杉野翼】

今回幼教子ども劇場を通して、子ども達に絵本の内容を伝えていくにはどうすればいいか、絵本の内容に興味を持ってもらえるかなどを最初は考えていた。子ども劇場を行い、まずは子ども達に楽しんでもらうこと、子ども達に楽しんでもらいながら自分たちも一緒に楽しめるよう子ども劇場で表現できる物語を選び、そこから話をどう子どもたちに表現するかを考えた。

最初は選んだホットケーキの絵本の話はどう表現すればいいのか全く分からなかった。何が合っているのか、ダメなことなどを考えてしまい表現することができても子ども達に楽しんでもらえるか不安だった。しかし、リモートでの劇場での表現だった為、リモートでしかない表現が様々あった。話を繋げて表現することが難しいと思ったが、先生達のアドバイスや子ども役として先生に見てもらうことで改善して良くなる所やリモートでカメラを使った表現などを取り入れたりして、話を繋げていき子どもたちに楽しんでもらえるような話を作れるようになってきたと感じた。

リハーサルなどをして改善して、初めて子ども達に劇場でしろくまちゃんのホットケーキを行った。私はカメラ担当だったので実際に劇場で表現は行っていなかったが、子ども達の姿をリモートでリアルタイムで見ることができた。私が感じたのは劇場で行う話に対して興味を持つ子どももたくさんいたが、劇の動きやカメラの写り具合を楽しんでいる子など様々

な子どもがいた。それを見ながら私たちも一緒に楽しむことができるのでは。子ども達の姿に応じてカメラの角度や写り劇での表現を変えて子ども達に楽しんでもらう上で一緒に楽しむことができると、1回目のリモートで子ども達に見せるしろくまちゃんのホットケーキを行って感じる事ができた。

しろくまちゃんのホットケーキでは、本物のホットケーキと製作でのホットケーキを使って劇を行った。どこで本物を出して、どこで段ボールで作ったホットケーキを使うか、場面ごとで決める必要があった為、劇を行う上でどのようにして表現するかが重要であり大変だった。子ども達の姿から課題を見つけ改善し本番ではより良い劇につなげることができた。子ども達の中には生地を焼いている所を見たことがない子どももいたと思うし、いたとしてもカメラを使いズームで写していたので子ども達にとって初めて見る大きさだったと思う。しろくまちゃんのホットケーキを通して、子ども達が家族などみんなで料理することの楽しさや好奇心など、様々な感情が芽生えてくれれば良いと感じた。また、私自身も子ども達の姿を見て自分が思っていたような言葉や反応をしてくれていた子どももいたので状況に応じて様々な対応をできれば子ども達もより、自然と楽しめることができると感じた。日々の生活の中でも子ども達は大人が驚くことをしたり、表現したりすることがあると思うので一つ一つの子どもの姿を見て保育士自身も成長していくのだと思った

【宮崎千也加】

今回の幼教こども劇場をグループで完成させるにあたって、多くの気づきと学びを得ることができた。「白くまちゃんのホットケーキ」という1つの絵本を基盤とし、子どもたちが興味を持ち楽しんでもらえるような導入や展開を考えていく中で、リモートという点が難しかった。道具一つにしても、見せ方やサイズ、背景との色等をリハーサルを通して試行錯誤しながら考えた。第一回目の九州大谷幼稚園とのリモートを行って自分たちの課題、改善点を発見し先生方の助言をいただいたり他グループとの意見交流を通してもっとよりよいものにしていくことができた。リハーサルをしても、実際にリモートで行うと通信の状況で声が聞こえてなかったり予想外の展開になったりした。私は今回、しろくまちゃんの役をして、うまく子どもたちの反応を汲み取れていない所や柔軟に対応することができなかったところがあった。その反面、こどもたちが私の声や行動一つ一つをしっかりと見て、真似したりする様子や「これかな?」という子どもたちの声を最も直接聞くことができ、子どもたちはこう言ったらもっと楽しくなるんじゃないかなと自分なりに考えることができた。それぞれの幼稚園で子どもたちの様子はバラバラで、みんなが同じように楽しむことができるようにするためには、まずは自分たちが楽しんでやるのが大事だと考える。また、今回はグループでの活動で役割分担をし、それぞれの配置でそれぞれの視点からのアドバイスや課題を出し合いながら、共によりよい作品づくりをすることができたと思う。

私たちは小道具一つ一つを工夫して作り、大変だったが、子どもたちはそれを見て「大きいフライパン（ホットケーキ）」と喜んでくれて嬉しかった。

この経験から、マニュアル通りではなく子どもたちの実際の姿から更に日々の保育を展開していくことが保育者には求められることの一つであると感じた。

【深町萌絵】

今回の幼教こども劇場を通じてたくさんを経験し、学ぶことが出来た。私たちのグループでは「しろくまちゃんのホットケーキ」を題材にして取り組んだ。絵本を選定する上で、子どもがこの絵本を見ても楽しめ、工夫をしたらもっと子どもと一緒に自分たちも楽しめるのではないかと、楽しめるということを大切にしながら選んだ。料理がテーマの絵本であるため、一つひとつの材料や道具、仕草が重要になると考え、大きく分かりやすく材

料・道具を製作したり仕草をしたりするよう工夫した。私が一番難しいと感じたのは、子どもたちとの対話をどこの場面に取り入れ、どんな対話をするかである。私は実際にカメラの前に立ち、お話が始まる前の導入として子どもたちと対話したり、しろくまちゃんたちが作ったホットケーキを子どもたちと一緒に食べる時に対話をしたりした。プレでも本番でも緊張をしたが、自分なりに子どもたちがこう話したらこう返そう等事前に考えて子どもたちとの対話を楽しんですることが出来た。プレと本番、合わせて3回リモートで対話的表現活動をしたが、子どもたちの様子は様々で集中して何も話さずじっくり見ていた子どもたちもいれば、質問に答えたり子ども同士で話し合ったりしていた子どもたちもいた。どの園も共通して本物のホットケーキを焼いた時の子どもたちの反応が良く、取り入れてよかったなと思った。子どもたちの多くは、ホットケーキを食べたことがあっても実際に焼いている様子はみたことはないの、ブツブツやピチピチに興味をもって見ていたと考える。幼教こども劇場で改めて表現についてよく考えることが出来た。

また、リモートで行うことは簡単ではなく、何度も構成を考え直したり、カメラの位置や切り替え、音声や照明等の打ち合わせをした。私は機械を扱うのに慣れていないため難しかったが、カメラや音声の担当するメンバーを中心に、皆でどうしたらよくカメラに映るか、話し合い進めることが出来た。

【三好花々】

この幼教こども劇場で「しろくまちゃんのホットケーキ」を題材に活動を設定した。この絵本の選定にあたり、私たちは子どもたちが見て楽しいのはもちろん、一緒になにか楽しめる物語、というのをすすめるのか、どのように物語を進めていくのかがとても難しく、色々と案を出したけど、なかなか上手く繋がらなかったり、表現出来なかったりした。しかし、途中の先生の助言だったり、実際にやって行ったり、客観的に見て考えたりすることで、どう表現したらいいのか、どのように見せたら子どもたちに伝わるのかと言うのがだんだんわかった。また、1番の課題である子どもたちが、一緒に楽しめるということも少しずつではあるけど考えることができた。そして、実際にリハーサルなどをしていく中で、自分たちが考えていたカメラワークや見え方が全然違っていたり、思った通りにいかないこと、協調がとても大事だと言うことを改めて学んだ。そこから、別々にしていた作業をみんなで行ったり、子どもたちにより楽しんでもらえるような演出を考えたり、実際にどう見えていたかなどを話し合いながら道具を作り直したりした。

そして実際に3回子どもたちとリモートを通して、自分たちで考えた「しろくまちゃんのホットケーキ」を実施した。子どもが実際に話したり反応をしてくれるため、率直に楽しかったし、自分たちの考えたもので喜んでくれたり反応してくれてとても嬉しかった。でもその分、臨機応変さが必要だったりした。そして、実際にやってきてみて学んだことがたくさんある。まずは、子どもたち1人ひとりだったり、幼稚園の特徴によって反応の仕方や反応する所が違ったり、年齢によっても見て捉えるところが違ったり、反応する所が違ったりしたことだ。牛乳や卵は実際に中から出たけど、粉類は出ない所では、4歳児の反応はあまりなかったが、5歳児では粉類の時に、「出てないよ。」と、出る、出ないの所を見ていた。他にも、子どもたちは体を一緒に動かしたり、参加して何事も行うことが好きだということもこの子ども劇場を通して、改めて感じました。

【古賀琢磨】

今回の幼教こども劇場を通じて、色々事を学ぶことが出来た。特に劇を子どもに楽しんでもらうための工夫や仲間と協力することの大切さ、その場での臨機応変な対応が学べたなと思う。

劇を子どもに楽しんでもらうための工夫では初め作ったホットケーキを写すだけだったものを先生からのアドバイスもあり実際に作るようにしたことでその場で作らなかったときの子どもの反応と作ったときの子どもの反応を比べると作ったときのほうが興味津々に見ている様子を感じられた。他にもカメラの角度をどうしたら子どもが見やすくなるかなどシーンの1つ1つでここはカメラ切り替えはすぐ移り変わるように、ここはゆっくり切り替わるようにやこの角度だったら見やすくできるなど考えてできた。

仲間と協力することの大切さでは、裏方が少なく、誰がここをやるなど最後の最後まで上手くいかなくて切り替えが遅れたことがあり、もっと話しあっていたら良かったなと思った。それでももっとよくするためにはどうしたらいいかなどみんなで話し合っただけで出た案を採用しながら進めた事でより良いものになっていった。

その場での臨機応変な対応では、私はカメラの切り替えを担当していたが、カメラに写っている人が子どもの反応を見ながら少し変えていてそれに合わせてカメラの切り替えをするのがあまり上手くいかなかったので私はまだまだなのでもっと頑張らなくてはいけないと感じた。だが私の班の田邊さんは子どもの反応を見てアドリブを入れたり急なアンコールのときに積極的に話しをしていてここまで臨機応変な対応が出来るのはすごいなと感じた。ここまで出来るようになるかは分からないがこの柔軟な対応が出来るようになりたいなと思った。

幼教劇場では色々なことがあったが子どもの楽しむ姿が見れたことが一番嬉しかった。上手くいかないこともあったが上手くいかなくてもちょっとしたハプニングがあっても子どもは楽しそうに見てくれていたから必ずしも完璧にできなくても子どもも自分も楽しい活動を提供できることが大切なのだと感じた。

【田邊歩乃佳】

最初は人数も揃わずうまく行くのか不安が大きかったが、段々物事が進むごとにみんなが積極的に行動してくれ、みんなが劇のためにどうしたらもっとより良いものになるのかを考えて行動していたに感じられ、自分も頑張るように気合が入った。

材料作りからこだわりどうやったら子どもたちに伝わりながら楽しんでくれるのか考えたり、声掛けや反応を伺えるよう台本を書き直したりなどした。

子どもたちの前で発表する時に子どもたちは興味を持って劇を見てくれていた。学生の声掛けに対して大きな声で反応してくれる場面もあった。本番、ホットケーキが焼けないハプニングなどあり、完璧ではなかった。でも臨機応変に対応した。

子どもたちのアンコールなど、予想していないことも沢山あった。オンラインで繋がっているため、話し合いがまともにできずもたついてしまったが楽しかったという子どもたちの声と達成感があり私も楽しかったと感じられ、とてもいい経験になったとおもう。

【田中梨里花】

このこども劇場を通して色々なことに気づき学ぶことが出来た。どのようにしたらリモートでも子どもたちに楽しさや面白さを伝えることが出来るのか考えるのが難しかった。ホットケーキを作る過程をどのように表現していくのか、本物を使いどのようにこのおいしそうな雰囲気をつたえるのか、おいしさをどのように表現するかなど一つ一つの作業が重要になってくる。材料や道具などもただ見やすく作るだけではなくリアリティを出すため牛乳が出ているように作ったり、卵の中身が出るように作ったりなど工夫しながら製作した。一回目のオンライン実践を行った時に反省点もあったが良かった点も多く、子どもたちの反応から学ぶことも多かった。二回目のリモートでは、一回目の反省を踏まえカメラの写し方や子どもたちへの声掛けなど工夫し前回よりもいい反応を得ることが出来ていた。二回目は五歳児だったので一回目の四歳児とは見た時の反応も違い、「また最初から見たい！」などアンコールが何回かきたのでその対応もみんなで素早く考えてできていたなと思う。リモートで

劇をすることは無いから貴重な体験をさせてもらったし、リモートをする時の準備やカメラの配置を考えたり、大変さを知ることが出来た。みんなで意見を出しながら工夫して制作したり準備したり色々大変だったが子どもたちが楽しそうに聞いたり答えたりまねしたりする姿を見てとても嬉しかったしやってよかったなと思った。